

「男は強く」から空手道へ……



**Seiji Kondo** 近藤誠司

●中部保全株式会社 専務取締役

血液型/O型  
好きな言葉/勝負



「空手が自分の生き方を決めた。」とご自身で言われるほど、空手一筋の人生を歩んでいらした近藤さん。2人のお嬢さんには教えても仕方がないのでと笑いながら、自宅の2階に道場を開き、学生の合宿所として利用したり、近所の少年達の指導にも当たっていらっしゃいます。そんな近藤さんに、空手について伺ってみました。

## 格闘技は技術よりもハートが大切

——空手のすご腕だと伺ってきましたが？

近藤 いやいや、それほどではありませんが、空手どっぷりの人生だということは、間違いありませんね。今も空手に関する予定が多くて、冗談でよく「本業は空手、副業が仕事」なんて言っているくらいですから。だから本業をさせてもらうために、副業もきっちり頑張らなきゃいけないなんて（笑）。

——平成6年に開催された第49回「わかしゃち国体」では、愛知県監督を務められたとか？

近藤 ええ、あの時は、ちょうど地元・岡崎市で愛知国体が開催されて、逃げるに逃げられず引き受けましたが、開催県での参加はお客様として参加するのは違い、大変なんです。とにかく開催県が早くに負けてしまっただけで、地元で盛り上がりませんから、そのプレッシャーには、かなりのものがあります。何がなんでも、勝たなければというような……。

——なるほど責任重大なんですね。それで結果はいかがでしたか？

近藤 おかげさまで優勝することができ、無事大役を果たすことができました。とにかく、勝ち負けは結果が出るまでわからないことですが、できるだけのことはして、他県のお客様を迎えようと必死でした。月火水は仕事、木金土日は合宿というスケジュールでしたが、仕事のある私としては、会社の理解があったからこそ、やることができました。本当にありがたかったですね。そしてそんな厳しい練習に、選手もよくついてきてくれたと思います。

——確かにすごいハードスケジュールですねえ。それではその後も、愛知県の監督を？

近藤 いいえ、優勝を機に後進に監督の座を譲り、翌年から福島県のヘッドコーチをしています。

——まあ、なんて潔い。でも、なぜ次が福島県で、しかも監督ではなくてヘッドコーチ？

近藤 その件に関しては、いろいろ言われましたね。愛知国体で優勝し、自分としては人生の一区切りがついたので、監督を退きました。しかし、和道会のナショナルチームの監督とコーチという間柄で、私が師と仰ぐ芦原瑞穂さんが、愛知国体の次の50回記念大会福島国体の開催県監督であり理事長で、私も芦原さんには精神的な面でかなり助けてもらいましたし、自分が経験して、開催県の大変さもわかっていましたから、お手伝いのつもりで引き受けたんです。

——男の友情というか、師弟のつながりといったところですね。

近藤 そうですね。幸せなことに、福島国体でも福島県が優勝し、おかげで2年続けて開催県国体で優勝という、めったにない経験をさせてもらいました。その上、芦原さんには、福島国体の記念誌の中で、過分な感謝の言葉までいただき、最高でしたね。

——ここまで近藤さんを空手道に引き込んだ、最初のきっかけは、何だったんですか？

近藤 そうですね、小さい時から、男は強くなければならぬ。けんかは、負けてはならないと思っていました。亡くなった父親が、気骨のある男らしい男の典型のような人で、「男は、前向きに死ね」とか「男の付き合いは、フンドシを質に入れてもやらなければならない」とか、常々言っていた

ましたから、その影響を受けていたんでしょうね。当たり前のように、高校までは柔道をしていました。それから大学に入って、空手をするようになったんです。

——あら、空手を始められたのは、意外に遅いんですね。どうして柔道から空手に？

近藤 柔道より、殴った方が早いからと…アハハ（笑）。

——男らしい発言ですねえ（笑）。それでは、小さい時から、けんか早い子だったとか？

近藤 そうでもありませんでしたよ。なにしろ姉が2人いて、それに男が3人続いて、その真ん中でしたから、上とケンカすれば叱られ、下をいじめると叱られて、兄や弟とより、仲間と遊ぶことの方が多かったですね。当時は、真ん中なんて損な気がしていましたが、今にして思えば、真ん中で良かった。上と下に全部任せて無責任でいられますから、ありがたい。兄や弟には、今も助けられています。

——空手は、始められて4年足らずで全日本で優勝されたわけですから、すごい進歩ですね。

近藤 確かに昭和44年の中京大学4年の時に、和道会の全日本学生で優勝しました。しかしそのために、人と同じ練習量では勝てないので、時間を惜しんではんばでない量の練習をしましたよ。相撲にしろラグビーにしろ、肉体をぶつけ合うスポーツには、必ず体力の限界があり、ゆっくり練習を積み重ねればいいわけではありません。それだけに、集中した練習が必要なんです。

——同じ格闘技の柔道をしていたという土台はあったものの、人より多い練習量というのは、かなりのものだったんで



しょうね。

近藤 そうですね。そしてその上さらに、格闘技は技術よりもハートが大切。いくら素晴らしい技術があっても、ハートのない奴は勝てません。死んでもいいというくらいの気持ちでないと、試合には勝てないと思いますね。ケガを恐れていたら、相手の“ふところ”に入っていけない。入らなければ相手の身体に触れられませんから、攻撃もできない。こちらが攻撃できる距離というのは、相手からの攻撃も受ける距離ということですから、当然のことながら危険も伴います。でも、攻撃的になれなくなったら選手としては終わりですね。

——全日本学生で優勝されたのですから、空手として頂点を極められたことになりますね。

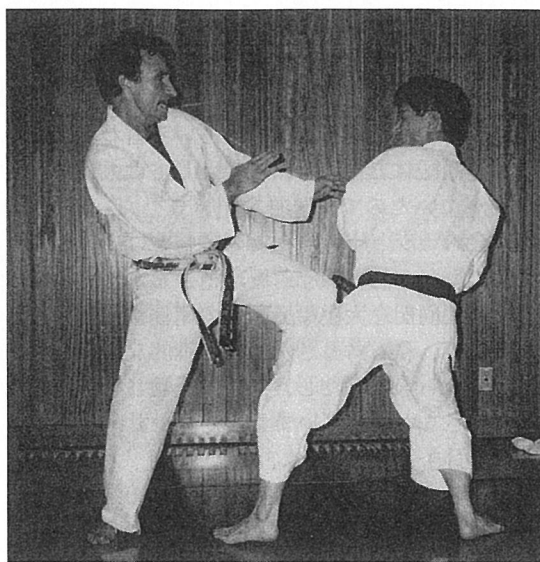
近藤 一応はそういうことにはなりますが、チャンピオンといっても、あくまでもその時点でのチャンピオンで、永久にチャンピオンというわけではありません。常に勝負の世界に身を置いていないと、勝ち負けに価値を見い出せなくなるし、その楽しさは感じられない。そして、勝ち続けることはとても難しいことなんです。



### 成し遂げた時の快感が魅力

——近藤さんが、現役を引退しようと考えられたのは、どんな時でしたか？

近藤 空手の練習そのものは、案外平気なんです。そして技術力や気力はあっても、基礎体力作りでは、若い人についていけなくなる。若い人と同じように走ることが苦痛になり、今日の疲れが翌日も残るようになってくる。そして、攻撃的な考え方ができなくなった時に、選手をやめようと思っていましたから、



僕は36歳で引退しました。

——36歳まで現役でいらしたなんて、すごいですね。大変な練習を重ね、そこまで現役でいらしたという空手の魅力は？

近藤 現役中は仕事終了後、大学で8時から練習。帰ってくるのは、夜中の1時という毎日でした。大会が終わると、「ああ、これで明日は練習しなくてもいい」とホッとするんです。練習では、他人が流した汗をいくら見ても、自分の力にはならない。自分が流した汗の分だけしか、力はつかないんです。もし、その汗を流すのがいやになったら、舞台に上がることを止めて、観客になった方がいい。しかし必死になって練習し、一つのことを成し遂げる。その終わった時の開放感や安堵感は、くせになる快感。何ものにもかえがたい価値があります。どんなスポーツでも同じでしょうが、それが空手の魅力ですね。そして、全国に散らばっている空手仲間との付き合いも、僕にとっては大切な財産になっています。

——全国のお仲間と会われる機会も、あるんですか？

近藤 みんな酒が好きなので、時間があれば、一

緒に酒を酌み交わしたりしますよ。それから、娘がサンジエゴでホームステイをしていた時に、予定より早く帰りたいと困っていたら、現地にいた後輩が、「監督には色々お世話になって、返すに返せない恩があります。」などと言って、チケットの手配など、娘を助けてくれました。空手に忙しくて、普段は娘のことをかまってやれませんが、この時ばかりは、父親として面目が立ちました。

——現役を引退された今は、後進の指導に当たっていらして、まだまだ空手との縁は切れませんか。

近藤 実は大学を卒業する時、僕たちの空手の師がドイツにいらっしゃるので、ヨーロッパに渡りたいと思っていました。ところが、僕が父親っ子だったこともあって、父は僕を手放したくなかったようで、ヨーロッパ行きを引き留められたんです。「少し待て」と。それで、1年くらい父親に恩を返すつもりで仕事を手伝い始めたんですが、そうこうしているうちに父親が亡くなり、ヨーロッパで空手の指導をする夢は叶いませんでした。でも、空手だけは続けていこうと…。今は、ヨーロッパで頑張っている仲間がいて、それに励まされながら、自分は自分なりに日本で頑張っています。

——現役を退かれて、空手に対して現役時代と変わってきたところはありますか？

近藤 ありますね。実は後輩に、4本前歯のない奴がいるんですよ。「いい年なんで、歯ぐらい入れろよ。」と言ったら、「また取れたらもったいない。高いですから。」なんて言う。「一体、誰が折った

んだ？」と聞いたら「覚えてないんですか、先輩ですよ。」と答えられて参りました。当然ながら、やられた方は覚えていますが、やった方は覚えていない。現役時代は、やるかやられるかの世界でしたから、ケガをした相手に対して同情することはありませんでした。でも現役を退き、40歳を過ぎて、人のお子さんを預かるようになって初めて、ケガをさせてはいけない、事故があってはならないと考えるようになりました。これは、大きな変化ですね。

——攻撃意欲がないと勝てないし、そのあたりが格闘技の難しさかもしれませんね。今後は、空手とどんなお付き合いになりそうですか？

近藤 今年3月31日まで中京大学の監督を務めさせてもらいましたが、4月1日から現場を離れ、総監督に荷を下ろさせてもらいました。しかし福島県のヘッドコーチもまだ続けていますし、4月1日から東海学生空手連盟の審判長も引き受けましたから、まだまだ空手との縁は、切れそうにありません。しかし、次の世代を育てるために、すべてから退き後進に道を譲るべき時がきたら、権力に執着せずに潔く身を引きたいと思っています。あとは、醜態を見せずに引退するのが、最後の成すべきことでしょうね。

——最後まで男らしく、引き際を潔くということですね。今日は、男の美学を教えたいただいた気がします。ありがとうございました。益々のご活躍を！

「……」  
「男は強く」から空手道へ……「」

